

司馬遼太郎

街道をゆく十九



街道をゆく 十

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十七年十月十五日 第一刷発行
昭和六十二年三月五日 第二刷発行

街道をゆく 十九

定価 一八〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 八尋舜右

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五十三-12
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九八二年

ISBN4-02-254959-9
Printed in Japan

街道をゆく

十九

本書には「週刊朝日」昭和五十六年七月十七日号・連載第四百九十八回から、五十七年三月十二日号・第五百三十一回までを収録。

目次

中国・江南のみち	
旅のはじめに	7
蘇州の壁	13
伍子胥の門	33
宝帯橋	45
盤門	59

呉こと呉ご

73

呉音と呉服

87

胥門と闔門

101

亡命と錦帯橋

115

「うだつ」と樋

129

西湖の風

143

岳飛廟

157

茶について

171

茶畑の中で

185

急須

197

茶における中国と日本

211

娘村長さん

223

海寧県塩官鎮	235
乾隆奇譚	247
布袋さん	261
瓦流草	273
獺というけもの	285
越州の田舎密教	299
会稽山へ	313
禹廟と梅干	327
酒の話	341
余姚駅からの遠望	355
日本史の影	369
寧波雑感	381

船に乗る

戎 克

ジャンクの遠征

目 玉

銭の時代

天 童 山

395

409

423

437

451

465

題字 棟方志功

え 須田剋太

装幀 原 弘

地図 熊谷博人

旅のはじめに



古代中国というのは、文明の巨大な灯台であった。

東アジアの周辺の諸民族は、古代、大なり小なり、その光りを光被し、それぞれ独自の文化をつくってきた。その例として、朝鮮がある。あるいはヴェトナム、また日本がある。

文明というのは、普遍的であればこそその名に値いする。他によって使われなければ、文明とよばれるに値いしない。古代中国文明は、ぜんぶんに周辺の民族から使われた。

この文明を築きあげたのは、いうまでもなく「中国人」である。

しかし「中国人」ということは、近代以前にはなかった。

とくに、人民中国の成立後、普及した。「中国人」は国籍呼称であつて、民族呼称ではない。その点が、まことにいい。

人民中国成立の諸内容のなかでもっともすばらしいことは、みずからを多民族国家とみとめ、そのなかの漢民族を単に「漢族」とよび、原則的には単に諸族の一つにおいたことである。さらには、圧倒的多数を占める漢族に対し、つねにその優位性を誇ることをいましめつづけてきた。この姿勢は、ひとつにはソ連、ヴェトナムなどの国境線上に、少数民族が線の内外に居住するという国防上のきわどさからもきているかと思われるが、そのように冷やかに見る必要はない。ともかくもこの美的な態度は、十分に賞揚されている。

多民族国家の大国は、他にもある。ソ連やアメリカなどがそうだが、この場合の歴史的内実は、中国にくらべ、多少不幸である。なぜなら、そこにいる少数民族が、ふるい時代——があつたかどうかはべつとして——その文明の成立に参加するところがなかったか、きわめてすくなかった。

中国の場合、五十余の少数民族がいる。

それらがいまになって群がり出たのではなく、すでに紀元前から存在し、古代文明の成立にそれぞれが役割を果たした。

たとえば、中国の戦国期にやや普及して、その後、生産事情を大いに変えた鉄（鐵）というものをとつてもそうである。鉄の文字の古形は鑛である。夷（非漢民族）が最初にそれを所有していたという歴史の痕跡をよくあらわしている。『管子』『山海経』『呂氏春秋』などに登場する伝説的存在の蚩尤（しゅう）というのは、酋長の名のようにもあり、怪物の印象もあり、あるいは異文化をもつ民族の総称のようでもあるが、要するに最初に鉄をつくり、所持していたらしい。

私は、民族というものに優劣とか血統的な神秘性を感じない。古代、民族とは、それぞれ食うための生産形式を共有し、その生産形式ごとにわかれていたと思つてゐる。つまりそれぞれが、稼業（しょうがい）をもち、しょうがい違いごとに民族が形成されていた。

古代中国の場合、西方から（あるいは南方から）青銅冶金に長けた民族がきたであろう。鉄をもたらしただもいる。あるいは遊牧という群棲動物を統御することで集団の生命を養っているひとびともいた。

おなじ農業でも、淮河・長江の東西線から南は、稲を育て、米を食う。古代の楚が、米を食う民族の国であった。春秋のころは、非米穀物地帯の中原のひとびとからは、楚は、気質、文化、などを異にする集団とみられ、荊蛮などとよばれていた。

「羌」

という中国西北角に住んで古代、粗放な牧畜をしていたチベット系の勇敢な民族は、周の王室とも血縁上の関係があったが、秦の人民の多くはこの「羌」の農耕化したものではないかと思われる。いまなおその末孫たちが、羌族として四川省などに住む。

遊牧民族についてもそうである。戦国期に趙国が北方の騎馬民族の服装その他軍制、戦技をまねて王以下が騎兵化したように、中国という文明成立のるつぽに入りこんだ要素として遊牧民のそれは、敬天思想から父系尊重にいたるまで、きわめて重要なものとして見ねばならない。

このように言ってくれば、きりがいい。

右のように、中国という地球上の地域は、普遍的文明を成立させる上で、まことに人類史

上、稀有な条件をもっていた。その文明は、すくなくともマルコ・ポーロ（一二五四～一二三四）までは、ヨーロッパを圧倒していたといえる。

日本の場合、七世紀から十世紀にかけてその文明の破片^{はへん}を受けて、国家と文化をつくった。十四、五世紀にも、再度の影響をうけ、その破片を日本文化というるつぽに入れ、触媒としてつかうことで、室町期という独自の美学的時代をつくりあげた。

こんど、そういうことを念頭に置きながら、旅をした。

まず遣唐、遣明^{けんめい}使船、さらには江戸期の日清貿易の上で関係のふかかった江蘇省、浙江省を歩き、次いで、四川省の広大な田園を過ぎ、さらにできれば稲作^{あか}少数民族に出遭^あいたいと思いつつ雲南省の昆明まで入ってみた。

蘇州の壁



